

かけはし

第47号 平成12年12月5日発行
千代田区教育委員会



大きく育て、うれしいな (婦恋自然体験交流教室)

主
な
記
事

- ☆ 教育委員紹介
- ☆ 千代田の子どもたちの「体験」

春に植え付けをした畑のダイコンやジャガイモなどが、たくさん実りました。大きな葉のついたダイコン、土のついたジャガイモを手にするると、新鮮な香りがしておいしそうでした。

* 教育広報「かけはし」は資源保護のため再生紙を使用しています。

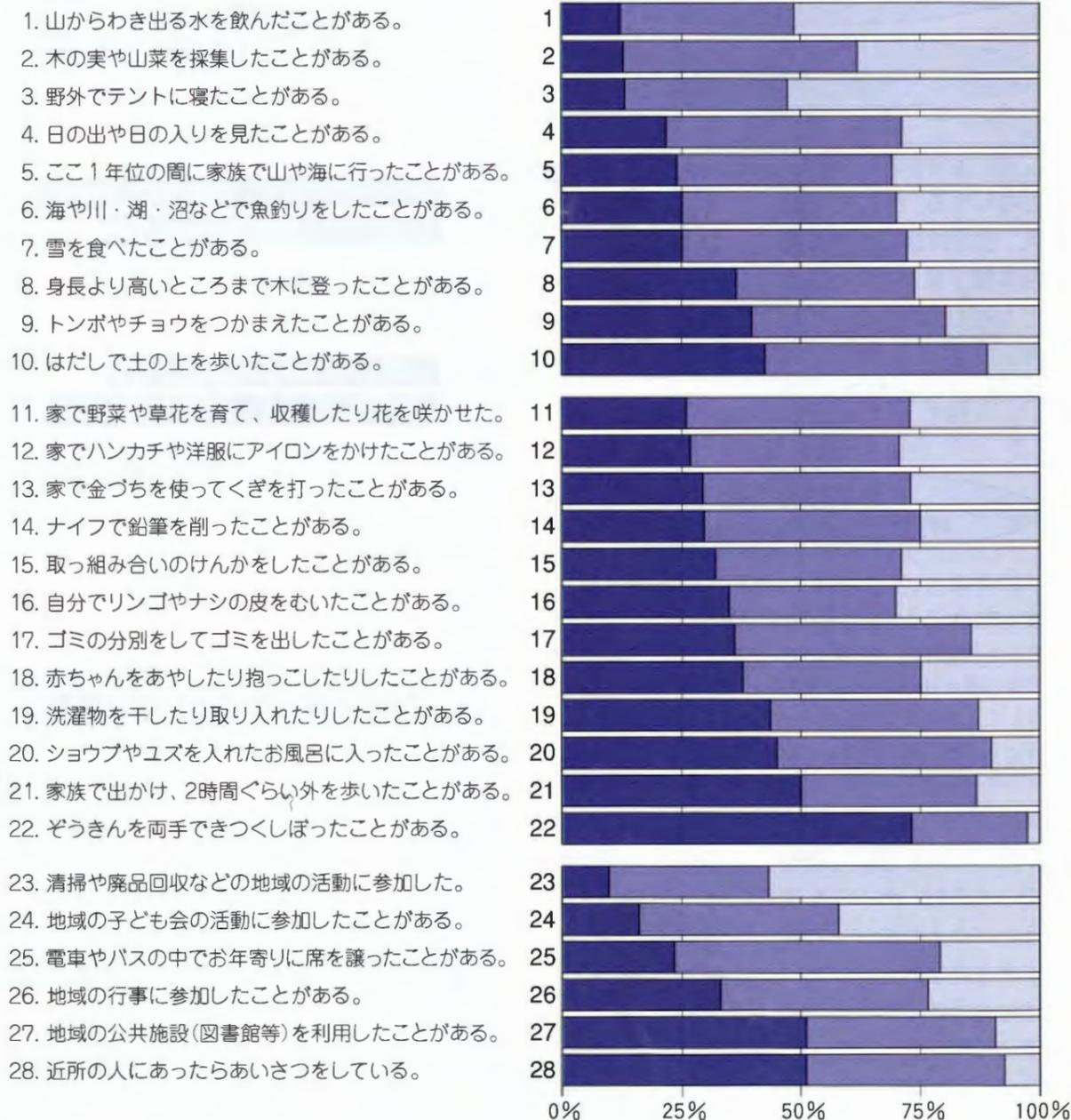
千代田の子どもたちの「体験」

— 千代田区立教育研究所 —

I. 調査の概要

1. 目的 千代田区の学校に学ぶ子どもたちは何を体験し、何を体験していないのか、その傾向と特色を把握することにより、子どもたちへの理解を深め、学校と家庭における指導に役立てる。
2. 方法 質問紙法によるアンケート調査
小学校 5年生 382名(8校) 中学校 2年生 394名(5校)
平成12年7月中旬実施
3. 内容 主に学校以外での自然体験・生活体験・社会体験について。

II. 調査項目と集計結果



教育委員紹介

石川晴彦教育委員・井澤一弘教育長の任期満了による退任により、平成12年10月19日付けで教育委員会は左記の構成となりました。
千代田区の教育課題に一九となって取り組んでまいります。

教育委員長 曾根 史子

教育委員長職務代理 横山 安宏

教育委員 栗石 英雄

教育委員 大杉 宏光

教育委員(教育長) 高崎 謙作

教育長就任のあいさつ

千代田区教育委員会教育長 高崎 謙作

このたび、教育長に就任いたしました高崎でございます。
保護者をはじめ地域の関係団体の皆様に、教育の充実・発展に対するご協力に感謝いたしますとともに、一言ごあいさつを申し上げます。
さて、今日の我が国の教育は、少子高齢化、高度情報化、国際化が急速に進行する中で、大きな変革に直面しているといわれております。
すなわち、学校では、いじめや、不登校、校内暴力、学級の荒れなどが深刻化しており、また少年による凶悪犯罪も続発しています。一方、経済のグローバル化の進展に伴う国際企業間の競争や、情報通信技術の急速な発達に迅速、的確に対応できる人材の育成が求められています。
このような中で、国におきましては、去る9月、「教育改革国民会議」から中間報告が出されました。その中で、「奉仕活動の導入」、「習熟度別学習システムの導入」、「中高一貫教育の推進」など、17項目が提案さ



られています。また、都におきましても、「心の東京革命」が提唱され、去る8月、家庭、学校、地域の取り組みの指針を示すとともに、行政の役割を定めた「行動プラン」が策定されました。
そして、本区におきましても、去る8月、中学校教育検討会から、中等教育学校(中高一貫校)の新設等内容をとした報告が出されました。
このように、21世紀を目前に控え、教育に関わるさまざまな課題が提起され、国民、都民、区民それぞれの立場で、大きな関心が行われています。
本区では、第三次長期総合計画を

策定しているところですが、その基本構想(案)の中で、「教育と文化領域」の基本目標として、「心豊かに学び、文化を創り出すまち」を掲げ、次のように述べています。
「すべての世代の区民が、その人格と個性を尊重され、心豊かに活力ある生活を送ることができるよう、生涯を通じて学習やスポーツによって自己実現を図り、自らのもつ能力や知識を地域社会に還元していくことの出来る環境づくりを行います。」
また、地域に受け継がれてきた伝統・文化を守り、育てながら、千代田らしい新たな文化を創り出していくための支援を行います。
そして、この基本目標を達成するため、今後、区民の意見や要望を頂きながら、具体的な施策や事業を示す「基本計画」を定めていくことにしております。
いずれにいたしましても、家庭や地域社会と密接な連携をはかり、学校教育および社会教育の充実、発展に努め、「教育と文化のまち千代田区」の実現に全力を尽くす所存でございます。
皆様のご理解と熱意あふれるご支援を心からお願ひ申し上げます。ごあいさついたします。

小・中学生で逆転する体験

「電車やバスの中でお年寄りに席を譲ったことがかなりある」小学生が29%に対して、中学生は19%で、「赤ちゃんをあやしたり抱っこしたりしたことがかなりある」小学生が43%に対し中学生は34%です。

生活年齢が増えるに従い体験も増えるはずですが、小・中が逆転する体験が多くありました。これは、中学生がごく最近の体験に限って答えたり、この時期特有の自意識の芽生えによる「てれ」があらわれたりした結果ではないかと思われます。

乏しいボランティア体験活動

「子ども会活動に参加したことがない」小・中学生が43%もあり、「清掃や廃品回収などの地域の活動に参加したことがない」小・中学生も57%です。

学校では地域の清掃活動に積極的に取り組んでいるのですが、自分の地域に帰って小さい子どもの世話をしたり、奉仕活動に参加したりする体験は、まだ乏しいことがわかります。



その他

「ショウブやユズを入れたお風呂に入ったことがある・かなりある」が88%あり、1項目だけの調査ですが、伝統文化体験は意外に豊かであると思われます。

文部省の1999年度の「体力・運動能力調査報告書」によると、青少年の基礎体力や運動能力は低下傾向が続いているようです。これも自然体験・生活体験不足と何らかの関係があるのではないかと考えられます。

Ⅳ. 結 び

子どもたちの生活は自然体験や生活体験・社会体験を抜きにしては成り立ちません。さまざまな体験が単に「したことがある」で終わらず、本当に自分の身に付いたものとなるのが今問われている「生きる力」をはぐくむこととなります。そのために、学校では自然体験教室や移動教室などの機会を設けて子どもたちが少しでも多くの体験を出来るように努力しています。今後は学校と家庭・地域などが連携を深めて子どもたちの体験活動をさらに豊かにしていくことが望まれます。アンケートの結果をご覧になって、ご家庭で話し合っただけであれば幸いです。

アンケート調査の詳しい資料は千代田区立教育研究所にあります。
TEL 3256-8446 FAX 3256-8166 (担当 土井：岡根)

地域や人のふれあいが豊か

「近所の人に会ったらあいさつをしたことがある・かなりある」が93%で、「地域の図書館等を利用したことがある・かなりある」は92%です。

地域の図書館などの利用が多いのは、学校における読書活動や調べ学習に図書館利用の機会が増えているからではないかと思われます。子どもたちと地域社会とのかわりは薄いと言われてはいますが、千代田の子どもたちには意外に豊かなふれあいが見られます。



先生方のコメントより

小・中学校の担任の先生方からアンケートの結果について多数コメントをいただきました。その一部を紹介します。

- ・家で草花や野菜を育てたことがない子や金づちでくぎを打ったことがない子が多い。これは、学校での草花栽培や図工などの学習経験が日常生活にあまり生かされていないといえるのではないだろうか。
- ・生活体験の調査結果と日常の生活態度との間にギャップを感じる。体験を通して何を感じ何を学ばせていくかが大切になってくるのではないだろうか。
- ・都会に住んでいても体験できること（例えば日の出や日の入り）などが少ないのは、毎日の生活が忙しくて心のゆとりがないことのあらわれではないだろうか。



Ⅲ. アンケート結果からいえること

全国調査と比べて自然体験が少ない

「トンボやチョウをつかまえたことがかなりある」のは千代田の男子で47%ですが、平成10年度文部省の調査によると61%です。「海や川・湖・沼などで魚釣りをしたことがある」は、千代田の女子で15%、文部省の調査では32%ありました。

その他の質問についても同様の傾向が見られ全体としては自然体験は乏しいといえます。

自然体験よりも生活体験が豊か

「ゴミの分別をしてゴミを出したことがある・かなりある」が85%、「洗濯物を干したり、取り入れたりしたことがある・かなりある」が90%ありました。

他の生活体験も「ある・かなりある」が70%を超え、自然体験に比べて生活体験が豊かであることがわかります。これが日常的な活動となっていればいいのですが。



土の感触を肌で感じたことがない子が11%

小学5年生や中学2年生になるまで土の感触を肌で一度も感じたことがない子どもが11%もいます。この子どもの57%がナイフを使ったことがなく、51%の子どもが取っ組み合いのけんかをしたことがないこともわかりました。また、「山からわき出た水を飲んだことがない」子どもが52%もいます。この子どもたちも同じようにナイフを使ったことや取っ組み合いのけんかをした経験が非常に少ないことがわかりました。

土の感触を感じた経験のない子は、ナイフを使うというような少し危険を伴う体験への取り組みにも消極的であるといえそうです。



とくにアウトドア的な自然体験に乏しい

「野外でテントに寝たことがない」が52%、「かなりある」と答えた子が13%です。また、「わき水を飲んだことがない」が51%、「かなりある」と答えた子が12%です。

わざわざ出かけなければ経験できないような自然体験は、意外に少ないといえます。



自然体験は男子、社会・生活体験は女子

「トンボやチョウをつかまえたことがない」男子が11%に対して、女子は25%です。



「自分でリンゴやナシの皮をむいたことがない」男子が27%に対して、女子は14%です。



自然体験はどの項目も男子が豊かですが、社会・生活体験は逆に女子が豊かです。小さい頃からの体験の仕方やすせ方に性差があることを改めて感じます。

98%もあった雑巾しぼり体験

「雑巾を両手できつくしぼったことがある・かなりある」が98%です。

小学校の入学当初にはほとんどできなかった雑巾しぼりも生活科などの具体的な活動や体験、日常の清掃活動を通して、ほぼ全員の子どもの出来るという結果になったのではないかと思います。

一斉清掃活動

千代田区では「ポイ捨て防止条例」に基づき、11月7日(火)に平成12年度第2回一斉清掃の日として、区民の方や事業所のみなさんに自宅・事業所周辺の清掃を行なっていただきました。区立の各園・学校でも、周辺の一斉清掃を行いました。ここでは和泉幼稚園・小学校での清掃活動について紹介いたします。

親子で一斉清掃 和泉幼稚園

「これは、燃えるゴミかな？燃えないゴミかな？」ゴミ箱の前で拾ってきたゴミを分別しています。

千代田区一斉清掃の日、和泉幼稚園の子どもたちは、道に落ちていたゴミを親子で拾いながら登園しました。空き缶、タバコの吸い殻、お菓子の包み紙など、いろいろなものが落ちていました。

「ゴミを道に捨てちゃ、いけないよね」「きれいになって、よかったね」幼児なりに感じたことを話しています。

親子でゴミを拾うという共通の体験をしたことにより会話もはずみます。

これが環境への関心や地域に目を向ける機会となり、神田のまちを愛する子どもたちの育ちにつながればと考えています。



和泉小の一斉清掃

和泉小学校では10月20日(金)今年度2回目の「一斉清掃の日」を計画・実施しました。地元町会の方々の協力のもと、

- ①千代田区ポイ捨て条例について知り、地域の美化に目を向けると同時に、自分も地域美化を推進していく一員であるという自覚を育てる。
 - ②気持ちのよい環境づくりを自ら行おうとする心をはぐくむ。
 - ③友達と協力して行う共同作業のよさを味わう。
- という3点のねらいを掲げ全校で参加しました。



1・2年生は和泉公園、3・4年生は佐久間公園、5・6年生は学校前の通学路をそれぞれ担当し、職員も全員が3か所に分かれ子どもたちとともに活動しました。軍手やビニルを手袋にした子どもたちは、落ちていたゴミや空き缶、枯れ葉などを一生懸命拾っていました。

「タバコの吸い殻が多いね」
「こんなところにつまようじが散らばっているよ」
子どもたちのつぶやきに、私たち大人がはっとさせられる場面もありました。この活動を通して、子どもたち一人一人が、ねらいに沿った心情を育てたことと実感しています。どの場所も1回目の活動日よりゴミの量が減っていたのは、とてもうれしいことでした。

九段社会教育会館 一時閉館のお知らせ

九段社会教育会館は改修工事のため、一時閉館しています。閉館期間中は、内神田社会教育会館、昌平児童館、神田さくら館をご利用ください。

閉館期間

平成13年8月20日(月)まで

なお、閉館中、生涯学習振興課は左記の仮事務所に移転しています。

生涯学習振興課仮事務所

(内神田社会教育会館内)

〒102-0047 内神田2-1-8

☎(5294)3650・3651

FAX(5294)3652

ご迷惑をおかけしますがご協力お願いします。

児童・生徒のあふれるフアイト!!

10月3日、平成12年度千代田区立小・中学校陸上競技大会が国立霞ヶ丘競技場で開催されました。

小学校五・六年生児童、中学校の生徒全員と、婦恋村の中学校から三十余名の代表選手が一堂に集い、日頃の練習で鍛えた力と技を競い合いました。今回の大会では次の大会新記録が生まれました。

中学一年男子100m走 記録12秒58

氏名 頼金 宗行(九段中)

中学一年男子1500m走 記録4分51秒70

氏名 臼井 博朗(二橋中)

中学三年男子1500m走 記録4分34秒84

氏名 中野 弘敬(麴町中)



2学期のひとコマ



育てた野菜 皮をむいてお料理 (番町幼)



中学生海外交流教育結団式

随想

きょういく

二十五年間の教育行政に引き続き、この三年間、縁あって大学の運営に係わっています。

キャンパスで学生たちと生活を共にしてみますと、昨今の学生の考え方や行動パターンが、私の学生時代とは、さまざまな意味でもあまりにも大きなギャップがあることに驚いています。この四十年の刻の流れは江戸の時代でしたら恐らく百年に相当するものではないかと思えます。

めまぐるしく変化する社会の動きに、的確に対処して行くには、新しい事態に弾力的に、柔軟に自分の考えや行動を断えず見詰め直して行く姿勢を保ちつづけないと、大きな失敗を招くのではないかと思う毎日です。

もとより、時の流れに阿ねることに、教育の基本、本質を見失うことがあってはなりません。

芭蕉の俳諧理念の一つに、「不易流行」(永遠に変わることのない不変。時代時代に応じて変化すること)という理念があります。(流行性と不易は、相対立するものであるが、その根源は、実は同じ。芸術はこの二面を備えて、はじめて真の芸術として完成するもの。―旺文社成語林より)

教育を考えるに当たっても、この考え方はあてはまるのではないか。不易と流行を常に念頭におき、新しい教育の姿を追い求めて行くべきだと思います。

教育が目指すものは何なのか。

学校教育の最後の段階である大学での教育の成果は、就職を通して直接に社会との接点にあり、多方面から評価されます。モラル、躡などの問題はさておき、子どもたちに、どのような付加価値を付け、社会に送り出すべきなのか。社会に受け入れられ、

教育と社会の接点



大杉 宏光

子どもたちにとって有益有効な価値を付けることが、教育の目指すものではないかと思えます。

企業の人事担当者の話によりますと、教育の目指す方向が見えてきます。

学校でのいわゆる偏差値の高低は、就職後の企業人としての成長、形成には何らの

相関は見られないとのこと。

単なる知識の多寡によることでの多い偏差値には限界があるということでしょう。大学での四年間のたとえ一時期でも学問あるいは勉強に懸命にいそしんだか否かにあるそうです。

学校では、みずからの興味から、何かを一所懸命に努力させる習慣を身に付けさせることが大切のようです。また、学校で何を学んだかより、どう学んだか(意欲・態度)、何を得たかが求められるとのことです。

社会は複雑化し、情報は溢れ、価値観は多様化しています。学校を出てどのような職業に就くかは別にして、健全な社会人として将来を生き抜いて行くことのできる力を与えなければなりません。次代を担う子どもたちに、「生き抜く力」を持たせるにはなにをすればよいのか、いやその前に「力」とは何なのか。われわれ大人は、この困難な課題に大いに悩み模索を繰り返して行くしかないのではないかと思っています。

おすすめ ひろみつ

千代田区教育委員

大学事務局長

編集後記

20世紀も後一ヶ月を切りました。12月、街は一斉にクリスマスイルミネーションが輝き、華やかになります。しかし、年が明けて、お正月のこま回し、凧上げ、はねつきなど日本古来の風物詩が見られなくなつて久しくなっています。

今号では、子どもたちの体験についてのアンケート調査を紹介しました。保護者の方々は28の調査項目についてどうでしたでしょうか。懐かしさを感じる項目もあつたのではないかと思います。子どもたちになるべく多くのさまざまな体験を積ませてあげたいですね。

近年の科学、情報技術の発達は目覚ましいものがあります。夢の世界の代名詞と言われていた宇宙旅行が実現されそうなる21世紀を、皆様はどのような思いで迎えられるのでしょうか。

「かけはし」についてのご意見・ご感想・ご要望をお待ちしております。

教育広報「かけはし」第四十七号

平成12年12月5日発行

編集発行/千代田区教育委員会

〒102-8688 千代田区九段南1-6-11

☎(3264)0151 内3114

きょういく 随想